

## プラグマティズム

田中王堂

中里良男

「大正・昭和期における西洋思想の受容と反応」というテーマのもとにプラグマティズムを、またプラグマティズムに決定的といえる影響をうけ、この哲学を自己の哲学的思索の視座とした田

中王堂に西洋思想の受容と反応のプロセスをさぐるわけであるが、王堂の活躍は明治四〇年前後の『哲学雑誌』を舞台とした桑木蔵翼とのプラグマティズム論争を発端にし、当時の文学雑誌として一方の雄であった『明星』における自然主義文学批判の論説、たとえば、『夏目漱石氏の『文芸の哲学的基礎』を評す』『我国に於ける自然主義を論ず』（明治四一年）等によって論壇に登場し、大正を通じ昭和の初頭にいたるまで独自の学風と批判は多くの学徒を魅了した。『現代文化の本質』（昭和四年、東洋経済新報社刊）を以って論壇の活躍は終る。時に昭和四年であり、明治四〇年、早稲田大学専任講師に就任以来、約二〇年たつてようやく文学部

教授になった。その後は自己の哲学体系を組織する仕事を開始し、その一部は大正一五年「ラスクの判断論について」と題する論文となつてあらわれている。

明治も終りの頃から大正年間を通じ王堂は『中央公論』を己れの批評の場として健筆を振り、その特色ある論旨の展開は世人に新鮮な印象を与えた。しかし、大正も一〇年を過ぎた頃になると次第に発表は少なくなり、王堂調といえる表現は時代に即応せず世人の関心から遠ざかったようにみえる。

「明治四十一年、僕、乃ち、『泡鳴氏の人生観並に芸術観を論ず』という長論文で彼（田中王堂）は兎に角一種の批評家としての位置を確保することができた。当時、和辻哲郎氏がまだ大学の学生として彼を崇拜し、『先生のおの大論文にはとても泡鳴は答へ得ないでしょう』と云つたとか、田中氏自身がその後僕に語つ

たことがある。」岩野泡鳴は大正六年二月号の『中央公論』誌上で批評家としての王堂についてこのように語っているが、事実、和辻哲郎は『帝国文学』明治四五年九月号で『哲人主義——田中王堂先生に』——と題して王堂の『哲人主義』(上・下二冊、広文堂書店 明治四五年四月刊)の書評とともに王堂の哲学について「私は先生の学説は殆んど凡てこれを受け容れた。……」(さて王堂先生が日本現代の文明に加へられた批評は実に正鵠であつて一つも反対すべき点はない。最も聰明な観察と批評である。)と、賛意を表現する一方、「私は先生の論文を読んでゐる間にしばしば『大ざっぱ』だという感じに襲はれたことを秘するわけには行かない」という批評もまじえて述べているが、その論調は王堂に對して概してきわめて好意に満ちているといつてよい。この和辻のいう「大ざっぱ」な調子が王堂調でやがて世人の関心から遠ざかった理由であらう。

田辺元、河上肇、阿部次郎、さらに森有正諸氏は戦前はもとより、戦後も、とくに森氏の場合にはもっぱら戦後いく多の影響を思想界に与えたが王堂はむしろ明治・大正の人といえる。この点、前記の諸氏と異なるものがある。したがって王堂の思想形成のプロセス、また西洋思想の受容と反応にもこれらのひとと違つた面もあると思われ。

さて、王堂の生家は享保年間、開拓農民として殖民した三富新田(現、所沢市中富)の開拓者の家系に属す。したがって旧家とは

いえ富農、豪農とはいえぬ境遇であつたと思われる。一時浮田和民の著書に傾倒し政治家を志したといふことだが十代後半、上京して同人社、東京専門学校等に学ぶなかで哲学者にならうと志し、王堂二三歳、明治二二年にアメリカに渡り、明治二六年、二七歳のときにはシカゴ大学でデューイの教えをうけ、ジェームズ、サントヤナの影響下に哲学を学び、明治三〇年、シカゴ大学大学院を卒業して帰国、その間およそ七年間、生活の資を捻出しながら刻苦勉強、悪戦苦闘の日々であつたことは在米時代の家への便りにあきらかである。

王堂をもって日本におけるプラグマティズムの紹介者、祖述者と比定するのが近代日本思想史の通説である。事実、桑木厳翼と王堂との間の、いわゆるプラグマティズム論争に際して、自己の立場をはっきり表明して、次のように語っている。「今日のプラグマティズムは勿論最後の哲学ではない。しかし将来如何なる哲学が代謝するも、必らず一度は今日のプラグマティズムの経路に由らなければならぬことだけは、僕の断言するに躊躇せざるところである。」(『哲学雑誌』明治三九年一〇月号)さらに、三〇〇号記念同誌、明治四五年二月号に西田幾多郎、桑木厳翼、加藤弘之らの論文とともに王堂は「プラグマチズムの後」と題して寄稿している。

この論文のなかで自然主義とプラグマティズムが時代思想としてほぼ同時期に明治の思想界に大きなイムパクトを与えたことを

述べ、プラグマティズムに関する研究書、著書が多数刊行され、  
「今日に於てはプラグマチズムの名称は世間のジョルナリストたち  
に依つて彼等の空虚なる思想、又は文章を飾るの道具とさるゝ  
までに到つて居る。」のであるが「現今の哲学界の思潮を考察す  
るにプラグマチズムの真骨頂は未だ曾て我が研究者に依つて多く  
理解されず」、「も一度聰明に、真面目にプラグマチズムの意義を  
吟味する必要があるのではなからうか。」と王堂は提唱している。  
そして、「プラグマチズム」によつて「人生に對して哲学が有す  
る關係を最も明瞭に見せしむる到つた。」とプラグマティズムを  
高く評価している。

額面どおり王堂の言にしたがえば、王堂はまさにプラグマティ  
ズムの紹介者、祖述者ということにならう。しかし、「プラグマ  
チズムの目的」が「経験を個体化することと、事件を流動化す  
ることにある。」と規定し、さらに「ワイマアの詩聖は動らくこ  
とは在ることであると言つたが、是れはよくプラグマチズムの見  
方を簡単に言ひ表はした言葉である。」と説明するにいたつては、  
王堂の生活から出た思索と体験の論理的表現の最適形態として、  
彼はプラグマティズムをとりあげたといつてもよいのではなから  
うか。前記のワイマアの詩聖とはもちろん、ゲーテのことである。  
八歳年長のJ・デューイから王堂は多くのものを学んだに相違な  
い。しかも、直接の師である。それにしてもJ・デューイについ  
て語ること余りにも少ないのは如何なる理由であらうか。王堂が

デューイに出會つた頃、デューイは教育哲学に全力を傾倒してい  
た頃と重なる。それ故、王堂の関心をさほど惹かなかつたのか、  
あるいは、年齢の差が小さいので王堂は大して重要視しなかつた  
のか、種々の推測が念頭に浮ぶ。『創造と享樂』（大正一〇年、天祐  
社刊）なる著書のなかに「ジョン・デューウエイの哲学」と名づけ  
るJ・デューイの思想紹介があるがわずかに11ページの小論にすぎ  
ない。

所沢近在の上富の多福寺に王堂の大大理石でできたヨーロッパ風  
の墓碑がある。その墓碑の裏面に次のような銘が彫られており、  
かろうじて判読できるほど墨跡は風霜にさらされ変色している。  
「徹底せる個人主義者自由思想家として最も夙く最も強く正しき  
意味に於て日本主義を高唱し我國独自の文化の宣揚と完成とに一  
生を捧げたる哲学者王堂田中喜一此処に眠る」。以上がその碑銘  
であり、石橋湛山の撰択によるものと伝えられている。

いうまでもなく湛山は杉森孝次郎とともに王堂の学風下に育ち、  
哲学の研究から経済学の研鑽に勉学の方向を変更させたのも王堂  
の強いすすめがあつたと伝えられている。湛山をして王堂の哲学  
に「正しき意味に於て日本主義を高唱」したという表現をとらせ  
た王堂の哲学に果していかなる特質があつたのか。もちろん、そ  
こに湛山の王堂哲学理解の特性があつたことは否定できぬ。だが  
王堂の哲学を単にプラグマティズムの紹介者、祖述者に限定せる  
通説とははるかに距離のある表現である。

まず王堂は明治末年、その哲学に「哲人主義」なる名称を与え、次に大正期には「徹底個人主義」昭和に入ってから「象徴主義」という表現を使用している。このなかで哲人主義は徹底個人主義であることを説き、「個人主義の信者たるわたくしが、其れの発展たる哲人主義の信者たることは、極めて当然であり、自然である」。(『国民哲学の建設』大正八年、天佑社刊)と述べ自己の在来の主張との論理的整合化に努力している。

「祖国を愛し、真理を求むる者へ」と冒頭に呼びかけ、王堂の『国民哲学の建設』は兆民の宣言「わが国は、まだ一つの哲学を有たない」に対応し「わたくしはこの大正七年の今日に到つても、なほ『わが国はまだ一つも哲学を有たない』と断言する者である、断言せざるを得ぬことを悲しむ者である。」と慨嘆する。

さて、王堂のいう哲学創造の道は何か、それは「自分の生活を反省すること」であり、「わたくし共、日本人は特殊の地理と、特殊の歴史とに依つて限られ、醇化されて来た日本人として生きることは出来るが、人間一般として生きることは出来ぬ」のである。したがって王堂は英国の生活を離れてロックの哲学を理解できず、米国の生活を外にして「ジェムス」(W・ジェムズ)を理解することは不可能であるという。王堂の前提にたてば、哲学の創造は自己の生活の反省より生れるものであるから、かかる主張が当然なものとなる。さらに王堂の論旨からすれば、このように生活の差違の面に立脚して考えれば、「哲学の問題は古今東西を

通じて一であるとするのは、浅人の浅慮である」ことになる。王堂にとって、そしてまた刻下の急務は「如何なる程度に、新来の文明を受け取り、如何なる風に、固有の特性に依つて、それを醇化すればよいかと云ふことである」。

王堂の論旨の展開は余りにも特殊に固執した文明論的色彩の濃い哲学の主張と非難されるかも知れぬが、普遍より特殊を、理想より現実を、全体より個を重視するのは王堂のかねての主張であり、またプラグマティズムの路線に依るものであろう。この『国民哲学の建設』を王堂が提唱した時期の思想界の状況を管見すれば桑木嚴翼が文化主義の前身、新理想主義を唱え、阿部次郎が『三太郎の日記』を、西田幾多郎が『現代に於ける理想主義の哲学』を著わし、土田杏村が『文化主義原論』を世に問い、文化主義が桑木、土田、金子筑水、野村隈畔によって唱えられていた。維新以来、富国強兵をめざし、「文明開化」の推進に努力してきた若き近代日本がここで一息つき、本格的な西洋思想研究のための官学アカデミズムの体制も一応完備し、いわば「文明」から「文化」へと研究受容の姿勢がととのい、その表われとしての文化主義の隆盛をみた、その時期に当るといえなくはないか。

王堂はそこにひとつの危機を感じ「国民哲学の建設」を訴えるのである。即ち、当代の理想主義、文化主義に普遍としてのヨーロッパを重用して特殊としての日本を忘却した思想のあらわれを感じたのである。「欧米ノ文明固ヨリ吾人ヲ益スルトコロ多シ。

然レドモ欧米ノ文明ナルモノモ決シテ唯一アリ得ベキ文明ニハア  
ラズシテ、百千種アリ得ベキ文明ノ一ナリ。」とは王堂が明治二  
七年、二八歳の折、シカゴ大学在学中、天長節祝宴に際してシカ  
ゴ在住の日本人を前にして行ったスピーチのメモと伝えられる。  
以上は家への便りの末尾に王堂が摘録したものらしい。この彼の  
文明観が王堂の一生を貫ぬいて彼独自の哲学を展開させたといえ  
よう。

(なかざと・よしお、近代イギリス哲学、亜細亜大学教授)